

伊勢信仰と街道 —古橋家文書からみる—

西海 賢二

Ise-faith and Historical roads in the Edo-Meiji Period: An Analysis of Furuhashi Documents

Kenji Nishigai

要約：近世以降の寺社参詣の高揚は、伊勢参宮がその中心であったといっても過言でないほど盛況であった。「一生に一度は必ず伊勢参り」といって人々は代参講で、あるいは「抜け参り」・「おかげ参り」などその参詣形態に違いはあるものの、夥しい数の人々が伊勢路へと向かった。とくに「おかげ参り」はほぼ60年を周期に爆発的に人々が伊勢信仰に寄せる姿を見出すことができる。

伊勢講は近世以降人々にとってもっともポピュラーな講として流布しており、関八州（関東地方）などで新田村などが開発されると最初に祀（勧請）られる神がお伊勢さんであったとも言われている。さて小稿では三河周辺を中心に伊勢街道にまつわる「忘れ去られた街道文化」として伊勢参宮の途中沿道での出来事や、伊勢信仰の伝播によって全国各地にさまざまな民俗文化が蔭生していった経緯や信仰習俗など奥三河の稲武（豊田市稲武町）の地を中心にした伊勢信仰や山岳信仰として著名な大峯講、讃岐金毘羅講、信濃善光寺講などの在地講に散見される「坂迎え」・「酒迎え」の習俗など伊勢神峠（伊勢賀美峠・石神峠・六十六部峠とも明記されかつ伝承にも確認される）をめぐる信仰や稲武の地において一三自治区長らによって明治15年以降135年間伊勢神宮司廳に200匁の生繭を奉納する稲武献糸会の歩みなどに着目しつつ、歴史民俗資料学に立脚して古橋家（愛知県豊田市稲武町タヒラ8番地）文書のなかから紹介する。

キーワード：伊勢信仰、街道、古橋家文書

はじめに

近世・近代期の稲武には稲橋・中当・夏焼・野入・大野瀬・押山・武節町・桑原・御所貝津・川手・黒田・小田木・富永の13ヵ村があった¹⁾。

現在の町の中心地稲橋・武節町を貫通するように縦断している国道153号は、近世期に中山道の脇往還として栄えた街道で、伊那街道もしくは三州街道とよばれ、信州の中馬（近世、信濃において発達した馬による物資輸送法。農民の駄賃稼ぎに始まり、一人で数頭の馬に荷をつけて引き、大量の荷物を目

的地まで輸送した）によって物資が運搬された。

この街道を利用して、塩を中心に海産物・木綿などが信州に運ばれた。武節町の「つたや」は元禄期から塩問屋として、大和屋は炭・木材問屋として繁盛し、今日でも往時の姿をとどめている。また、伊那街道は善光寺道として参詣者の通った道であり、これと交差する現在の国道257号は遠州の秋葉道で、現在でもこの街道沿いには善光寺・秋葉山大権現と刻まれた常夜灯や道標が2基確認される²⁾。

それは明和5年（1768）の「秋葉山常夜灯」と寛政9年（1797）の「道標」である。以下この2基を

1) 拙著（2015）『山村の生活史と民具—古橋懐古館所蔵資料からみる—』岩田書院

2) 前掲1

紹介する。この石造物は北設楽郡、豊田市内で確認されるものとしては最古の部類に入るものであり、かつ奥三河の近世における秋葉山信仰の展開を考える上でも貴重なものである。

①秋葉山常夜灯

(所在地) 稲橋字タヒラ八番地・古橋本家北東角

(高さ) 211センチメートル

(銘文)(表) 秋葉大権現

(右側面) 明和五子年

(左側面) 五月吉祥日

(裏) 寛政五丑六月下壇造立

四代目 義陳 源六

この常夜灯の銘文には四代義陳(宝暦5年(1755)～文政10年(1827)の名が見えるが造立そのものは三代義伯(享保17年(1732)～安永6年(1777)が行い、その後、下壇だけを義陳が追加したものである。

②道標

(所在地) 稲橋字寺下・稲橋駐在所前(交差点脇)

かつては角屋①常夜灯前(現・長谷川家)の表角にあったものを道路拡幅により移転したもの

(高さ) 55センチメートル

(銘文)(表) 右 ほうらい

あきは

(右側面) 古橋氏

(左側面) 左ぜんくわじ

(裏) 再興寛政九丁巳年

九月吉祥日

この道標は近年になって再度移動され、現在は交差点の一角にある。何度もの移動と、かつて消防団員の力石に利用され、度々地面に叩きつけられたので全体的に大きく破損している。ちなみにこの道標は義陳が造立したものであり、刻文にある「ほうらいじ」は鳳来寺(新城市)、「あきは」は秋葉山本宮秋葉神社(浜松市天竜区春野町)、「ぜんくわじ」は

善光寺(長野市)を指している。古橋家の古文書群のなかには、この三者に関連した古文書を数十点確認することができる³⁾。

稲武町域の教育・文化面さらには勧業に目を転じると、近世中期以降は豪農古橋家の存在が目目される。古橋家は18世紀初頭の享保2年(1717)に美濃中津川より初代の義次が秋葉山参詣の途次、この地に歩を止めたことが契機となり当地に入り、代々、酒・味噌の醸造を生業としていた。なかでも六代当主源六郎暉兒(1813～1892)は、低迷していた家計を立て直すための家政改革に着手するとともに、天保初年から自費で購入した杉苗を村内各戸に配り共有山への植林を行った。また、天保の飢饉(1833年と1835～1837年の冷害による凶作を頂点とした前後五年間に及ぶ飢饉)の体験を踏まえ、粃43俵を出資して各戸に備荒貯蓄を勧めた。

その一方で暉兒は国学者や報徳思想の考えに傾倒し、文久元年(1861)には尊皇攘夷を主張し、周辺の農村へも呼びかけ農兵隊を組織している。文久3年(1863)には江戸へ出て、平田篤胤の門下へ入門し、江戸滞在中に国学者・儒学者、勤王の志士などの書画骨董を多数購入している。

明治5年(1872)に、彼の「百年の計は山に木を植え、国家千年の大計は人物を養成するにあり」という考えを基に、同年8月15日、武節城址近くの無住の一円寺を校舎として、明月清風校を開校している。また、植林だけでなく茶・煙草の栽培、養蚕・産馬などの殖産興業に対応し、後の大日本農会の母胎となった座談会(農談会)を開催している。その子七代当主義真(1850～1909)とともに、明治という時代を的確にとらえた先駆者でもあった。この間を象徴するように暉兒は伊勢信仰にも深く帰依しており、慶応元年から3年にかけては伊勢神峠に伊勢の遥拝所を設置するとともに、この峠において明治11年(1878)名古屋からの帰路「天は、なぜ、自分を、すり鉢のような谷間に生まれさせたのだ?」と貧しい村に生まれた境遇を嘆いたと言います。しかし、前掲の伊勢神峠の上から、周囲の山々や平野を見渡ししながら、一つの確信に至ったそうです。「天

3) 前掲1

は、水郷には魚や塩、平野には穀物や野菜、山村にはたくさんの樹木を、それぞれ与えているのだ」そう確信した彼は、植林、養蚕、茶の栽培など、土地にあった産業を新たに興し、稲橋村を豊かな村へと発展させることに成功している。(平成26年9月29日、第187回臨時国会における安倍晋三総理大臣の所信表明演説の締めくくりとして紹介され世間の耳目を集めたことは記憶に新しい)⁴⁾。

一 忘れさられた伊勢信仰の習俗

信仰を語るときに、とくに歴史学、民俗学らの研究者のまなざしは比較的的日常性を見落としていることは否めない。ここでいう日常性とは、例えば、私の8年ほど前までの勤務地東京都町田市相原町で、もう30年近く前のこと、齢80才を超えた一人のお婆ちゃんにこう言われたことがある。「あんたはあちこち回って、足痛くならないのかな、ここじゃね、大井川日待ちという日待ちがありました」。大井川日待ちと言われて始めは何を言っていたのか皆目分からなかった。日待ちなかでも女人講と日待ちの分布については拙著『江戸の女人講と福祉活動』(臨川書店、2012年)で詳細に報告したことがあり、とくに日本で一番女性のわけても年齢階梯制による女人講の盛んなのは茨城県と千葉県の利根川流域に分布していることは理解していた。近世の19世紀の文化・文政期の文献によると、利根川流域では、女性たちの集団が集まる日待ちとして月に13回もあったことが確認されている。例えば一二夜講、一三夜講・一五夜講・一六夜講・一七夜講・一八夜講・一九夜講・廿夜講・二十一夜講・二十二夜講・二十三夜講・二十六夜講などである。これが年齢集団ごとに講集団が形成され、いわゆる棲み分けされていることは社会学や民俗学では一般化されている。例えば二十六夜講は60代の女性たちの参加が多く、70代になれば葬式などの時に裏方を取り仕

切る無常講もしくは「おとぎ衆」としてその機能分担が行われるといういわゆる年齢階梯制による付き合いが存在している。さらに、成田・佐倉・佐原・銚子周辺では「吠一つ」という言葉が今日も生きている。葬式の時など「吠一つでお願いします」との触れが廻ったりする。それはお付き合いの状況で男性一人だけお手伝いに来てください。これが「吠二つでお願いします」となるとご夫婦でお手伝いに行くという習俗が伝承かつ文献でも確認できる。さて前掲した「大井川日待ち」というのはそのお婆ちゃんの説明によれば相原から伊勢参宮に行くのはおおよそ正月7日から10日前後に立出して3月の7日から10日に戻る。60日から63日で帰る(ここでは一般「下向」と呼んでいた)これは言うまでもなく農作業の進行との関連があり、この日程はほぼ一定していたという。さらに当地では伊勢参宮に代参講で立出して丁度一週間くらい後に駿河国(静岡県)の大井川まで歩を進めた頃で、この頃になると代参者(導者とよんでいた)の足裏に肉刺ができるということで、この日は村中あげて「豆を炒っていけない」という禁忌があったという内容であった。語呂合わせと言えればそれまでだが伊勢信仰を巡るこうした習俗は比較的等閑されているものである⁵⁾。

二 伊勢参宮に見る参詣習俗

伊勢参宮(伊勢参りともいう)は伊勢(三重県)伊勢市に鎮座する伊勢神宮に参詣することをいう。国家祭祀であったことから一般俗人が伊勢参宮にするようになったのは中世後期から近世に入ってからのものである。とくに伊勢講、神明講の簇生により代参講が確立するとともに伊勢から御師(オンシ)の廻壇が盛んになると関八州あたりでも18世紀以降には村方に多くの御師が伊勢講の講元宅などを宿泊先として多くのこれがその後の伊勢参宮が年中行事化することが一般化したことが知られている。関東

4) 芳賀登(1971)『明治維新の精神構造』雄山閣出版、古橋茂人(1977)『古橋家の歴史』財団法人古橋会、芳賀登編(1979)『豪農古橋家の研究』雄山閣出版、芳賀登(1993)『維新の精神 豪農古橋暉児の生涯』雄山閣出版、稲武町教育委員会編(1997)『稲武町史・史料編近世II』稲武町、高木俊輔(2011)『明治維新と豪農古橋暉児の生涯』吉川弘文館
5) 拙著(1999)『稲武町史一民俗資料編一』愛知県北設楽郡稲武町、拙著(2014)『旅と祈りを読む―道中日記の世界』臨川書店

方面では伊勢参宮だけでなく、東海道筋の秋葉、豊川稲荷、津島、熱田などにも参詣し、なかには伊勢参宮をしたあと大和、高野山、さらには四国金毘羅などを廻り、帰路には多くの人々が善光寺などに足をのぼすことが多くみられた。以下関東方面や三河からの伊勢参宮に関わる「錢別」・「留守見舞」「坂迎え」・「酒迎え」⁶⁾を紹介する。

「 丁 天保十二年
伊勢参宮祝儀帳
丑 三月廿三日 」
成田市史編さん室藏

三月廿三日 目出度出立

一 金百疋		弁左衛門
一 金百疋	おし畑	七右衛門
一 金百疋	あふみ	七右衛門
一 金百疋		成田山
一 金百疋		六兵衛
一 金貳朱	日下	勘七
一 金貳朱	大木	治兵衛
一 金一朱	たつや	所左衛門
一 百文	みはらや	寅松
一 貳百文	飯田屋	宇兵衛

「 甲 嘉永七年
留守見舞覚
寅 七月吉日 」
成田市史編さん室藏

覚

一 金壹朱		新蔵殿
紙壹状		
一 金貳朱		七兵衛殿
紙壹状		
一 金壹分		桂助殿
紙壹状		
一 金壹朱		勘右衛門殿
紙壹状		
一 金壹朱		七郎兵衛殿

一 金壹朱		甚左衛門殿
紙壹状		
一 金貳百文		治郎兵衛との
紙壹状		
一 金貳百文		紋右衛門
紙壹状		

これは近世期とくに18世紀中葉以降に江戸をはじめ関八州に信仰圏を拡大した成田山新勝寺の門前にて土産物販売を生業としていた店主が伊勢参宮に出かけた時に近隣の商店主もしくは成田山からも錢別さらには留守見舞をいただいたものを認めたものである。この文献は前掲した東京都町田市相原の伊勢参宮に関わる伝承とは異なる3月下旬に伊勢に出立していることがわかる。これは明らかに生業体系の違いが1月出立して3月初旬に戻る農作業に関わるものと商店主という商業に関わる人たちによる伊勢参宮であったことがわかる。これなども伝承だけでなく文献からも参詣の時期が異なっていたことが知ることができ時間軸を中心に考える歴史学と伝承としての1月初旬というものが相関関係として読み込むことの必要性を認めることが肝要であろう。

また、留守見舞帳に見られる「紙壹状」という記載と伝承ではほとんどが紙壹状ではなく饅頭粉を留守宅に届けたものであるとあるが、これも前掲と同じく生業体系の違いが見舞い品の異なる記載となっているものであろう。さらに留守見舞帳には土産物の控え書きあげられており、具体的には伊勢だけでなく江戸で当時評判になっていた「山本山」の海苔や干物をはじめ老人などには煙管などと土産物も人に応じていたことも併せて確認することができる。

「伊勢参宮 文久三亥年
両社参詣親類錢別扣帳
金毘羅大権現 正月九日出立」
成田市史編さん室藏」

には、伊勢参宮と金毘羅大権現の両社を参詣した

6) 拙稿(2016)「伊勢信仰の地域的展開—愛知県豊田市稲武献糸会の活動から」『やまぐち地域社会研究』第13号、拙稿(2016)「社寺参詣と諸儀礼」『伊勢民俗』第45号

ものには饞別（見舞）の記載が前掲の者と異なり、参詣距離の問題、さらには参詣日程が拡大していることを反映して伝承にて確認された「饞鈍粉」記載と親類縁者の記載は村内だけでなく近隣の親類関係だけでなく付き合い関係を拡大しての饞別が多く寄せられていたことが確認できる。

次に、稲武周辺では伊勢信仰に関連する史料として以下の4点を確認することができる。

① 「唯四郎
伊勢参宮酒迎受納帳」

一般財団法人古橋会藏

年代の明記はないが、同じ横帳と合冊されているものに天保3年（1832）の善光寺酒迎帳が綴じられていること、付加して六代当主暉兒の名主代行として知見を拡大するため伊勢参宮をした年代との関連から天保3年前後のものと思われる。

② 「嘉永六癸丑年
伊勢参宮江留守坂迎刃至未竟
見舞

正月廿二日発足小木曾源太郎
二月四日帰宅当丑拾八才

③ 「慶応二寅二月廿日出立四月八日 下迎
伊勢両宮御饞別
参宮御産 覚帳
象頭山御酒迎
古橋英四郎」

④ 「おかげ参り他施し金控」

これによって近世後期の伊勢講、伊勢参宮の実態は、ある程度判明する。

①の「伊勢参宮酒迎受納帳」には伊勢参宮に伴う酒迎え（さかむかえ）で受取った品物と受取った人および所在が明記されている。

酒迎えは遠隔地から帰って来た者を村境で出迎える行事である。出迎える者が旅行者（代参者等）な

どをねぎらって、其の場所で直会をすることが多いことから、「坂迎え」「境むかえ」とよばれることもある。

また、古代には新任の国司が国境に到着したときに、国府の官人層が出迎えて直会をする儀式も「さかむかえ」とよばれていた。近代以前の鉄道機関などが未発達ところに遠隔地に出かける寺社参詣などは、現代とは比べものにならない困難をきわめたものであった。例えば近世期に江戸周辺の者が伊勢参宮などにかかる日程は約2カ月も要した。おのずと旅に出かけることは、それこそ今生の別れをも予想され、家人や村人との間に盃を酌み交わされることもあった。それが長旅も終わって帰村したとなると、家人や村人も旅行者以上の喜びとして、村境や峠などで宴をはることが行われたのである。

稲武周辺で確認される伊勢信仰、善光寺参り、大峯参り、金毘羅参りに関する酒迎えの習俗にはいくつかのタイプが確認⁷⁾されているが、代表的なものは村方に帰参した者と出迎えの人があった所で直会をするもの。近世後半に顕著になった例としては伊勢参宮の若者たちの抜け参りの出迎えに着飾った馬に旅人を乗せること、伊勢音頭に合わせて帰参することなどがあった。このほか酒迎えのとき、旅人がその場で「ハンバヌキ」と称して、脚絆を取る儀式を行うところも各地にみられた。

一 赤飯	夏焼
一 御酒一樽	辰蔵様
一 御酒一樽	瓦師 伊左衛門様
一 鰹節二	町 懐古様
一 三十二銅	村 惣兵衛様
一 酒	村 助三様
一 酒	村 常四郎様
一 酒	村 藤兵衛様
一 酒	村 藤右衛門
一 酒	々 半蔵様
一 々	々 すすき
一 々	々 為蔵様
一 々	々 朝右衛門様

7) 拙著（2014）『旅と祈りを読む一道中日記の世界』臨川書店

一	々	々	喜三郎様
一	々	々	惣太郎様
一	々	々	源兵衛様
一	御酒一樽	々	勘蔵様
一	御酒一樽	町	玄春様
一	々	々	源五郎様
一	同	村	伝三郎様
一	同	村	弥次右衛門様
一	赤飯二重	夏焼	伊左衛門様
一	酒		弥惣治
一	酒		太兵衛
一			吉右衛門
一			兵右衛門
一			伊兵衛
一	赤飯二重	町	又吉様
一	同		宗十様
一	同	夏焼	治郎兵衛様
一	御酒一樽		
一	小豆飯二	村	みのや
一	御酒一樽		
一	饅頭二重	村	左助様
一	御酒一樽		
一	御酒一樽	町	伝吉様
一	御酒一樽	町	三五郎様
一	酒	夏焼	三治郎様
一			松蔵様
一			兵助様
一			利八様
一			嘉十様
一	赤飯二重	村	弥左右衛門様
一	赤飯二重	町	利左衛門様
一	同	ささ平	甚吉様
一	御酒一樽	町	三治郎様
一	同	同	文五郎様
一	同	桑原	清十郎様
一	青銅百疋	町	半四郎様
一	うんどん二重		龍光院様
一	紙一帖	同	御隠居
一	うんどん二重	町	角蔵様
一	酒一樽		仁兵衛様
一	赤飯二重	御所貝津	

一	御酒一樽		総兵衛様
一	饅頭一重		源助様
一	御酒一樽	ささ平	喜代蔵様
一	同		達蔵様

この史料には「酒迎え」の場所は明記されていないが、おそらく伊勢参宮を果たして戻ってきた19才で名主代行になる直前の唯四郎（六代当主暉兒）を五代当主の義教らをはじめ本家（古橋家の屋号）の家族をはじめ使用人らが出迎えたものと思われる。それに先立って稲橋村、武節町村、夏焼村、桑原村、御所貝津村からの村人をはじめ寺の住職をはじめ（寺の隠居）かつ本家の分家筋にあたる美濃屋をはじめ本家に出入りしている奉公人や職人などが「酒迎」料として赤飯、御酒、鰹節、饅頭、紙、小豆飯、饅頭などが唯四郎の労いをかねて届けられていたことがわかる。なお、古橋家（本家）では史料で確認される限り三代義伯、四代義陳、五代義教、六代暉兒、七代義真はすべて17才から20才前後もしくは村方の名主などの役職者となる前後に必ず伊勢参宮を経験（通過儀礼）としていたことが確認される。これは伊勢参宮をすることによって知見を広めるだけでなく、その後村政をつかさどるときに指標にしていたことも併せて確認することができる。そのことが稲橋村だけでなく近隣の村々からも「酒迎」が寄せられていたことに繋がっていることは明らかである。

②の「い勢参宮江留守見舞迎至未覚」によれば、この伊勢参宮は嘉永6年（1853）の正月22日に野入（豊田市野入）を出立して2月4日に帰宅している。おおよそ2週間の日程であった。幕末頃の奥三河周辺の人々の平均的な日程と思われる。

「	嘉永六癸丑年	
	い勢参宮江留守坂迎至未覚	
	見舞	
	正月廿二日発足	小木曾源太郎
	二月四日帰宅	当丑拾八才
」		
一	百文	源兵衛
一	百文	源三郎

	留守見舞		一 拾貳文	平右衛門
一 牡丹餅二重			一 拾四文	弥吉
一 百文	久左衛門		一 廿四文	直吉
一	留守見舞		一 赤めし壺じゅう	久左衛門
一 牡丹餅二重	源兵衛			
一 牡丹餅二重	繁蔵	この小木曾源太郎も前掲の暉兒と同じく後年になつて野入村の村役人に名を連ねた人物であり、古橋家の当主がそうであったように野入においても伊勢参宮を通過儀礼的に10代の後半から20代前半に参宮をしていたことを見出すことができる。		
一 右同断	新兵衛			
一 牡丹餅一重	角五郎			
一 餅壺重	久左衛門			
一 百文	佐吉			
一 百文	夕助			
一 百文	新蔵			
一 百文	角五郎			
一 百文	左多二			
一 廿四文	林次	「慶応二寅二月廿日出立	四月八日	下迎
一 廿四文	青十	伊勢両宮		御饞別
一 白米貳升	五郎左衛門	参詣 御産		覚帳
一 百文		象頭山		御酒迎
一 百文	八蔵			古橋英四郎」
一 赤メし二重	柳吉		御饞別	
一 拾貳文		一 貳朱		御寺様
一 赤めし二重	勇助	一 四百文		いずみやより
御酒礼		一 貳百文		太治郎殿
一 九拾三文	利兵次	一 貳百文		浅吉殿
赤飯貳重	源三郎	一 貳百文		庄右衛門殿
百文		一 百文		栄吉殿
一 百文	ながし 長吉		留守見舞	
一 百文	繁蔵	一 うんとんこ 一重	町	つたや
一 三拾四文	米蔵	一 うとん 大二重		玄俊
一 拾貳文	なを	一 豆腐 壺丁	村	浅右衛門
一 拾貳文	作十	上印御札		
一 拾貳文	八五郎			大神宮
一 拾貳文	兼次			金毘羅御守代百廿文
一 拾貳文	伝兵衛			春日社札 石清水八幡宮
一 拾貳文	清治郎			住吉 つしま
一 拾貳文	喜代太			風宮
一 百文	助左衛門	中印		
一 拾貳文	由之丞			伊勢御祓
一 拾貳文	久四郎			外金毘羅町札
一 御酒壺樽	伊兵衛			つしま
一 拾貳文	政五郎	一 うとん 小貳重	村	文治郎

- 一 同 大貳重 村 惣太郎
 - 一 赤飯 中貳重 村 弥治右衛門
 - 一 うとんこ 小貳重 村 源左衛門
 - 一 うとん 小貳重 町 銀之助
 - 一 花餅 小貳重 村 金四郎
 - 一 西瓜 貳ツ 平沢村 弥六
 - 一 うとんこ 一重 村 勘蔵
 - 一 同 大貳重 大工 清七
- 中馬出入二附
十一ヵ村総代而行

この史料によって伊勢参宮、金毘羅大権現、春日大社、石清水八幡宮、住吉大社、津島参詣ルートも具体的に把握することが可能である。前掲の野入の小木曾氏の伊勢参宮のみ日程が14日間であったのに対して、英四郎（後の七代当主、義真。この年数え17歳のときであり、そろそろ六代暉兒をバックアップする立場にあり、2年後に明治の世となり彼は19才で名主になっている）は48日間で伊勢参宮と讃岐金毘羅大権現の参詣をしている。さらにこの帳簿によれば尾張の津島神社、京都、大坂、奈良周辺の石清水八幡宮、住吉大社、春日大社も併せて参拝している。まさに当時としては大旅行であるとともに将来を嘱望されていた義真にとっては、古橋家だけでなく当地域を担うための社会勉強としてかつ世間を知るための旅であった。さらにこの慶応2年（1866）、翌3年には六代当主が伊勢神峠に伊勢の遥拝所を設置する準備をしていた時でもあり、個人の参詣というより村単位のお札をいただくなど、最後に「十一ヵ村総代而行」あること、さらに中馬利用の旨が認めており、慶応2年の伊勢、金毘羅参詣は地域にとってもそして新しい時代を義真に託していたことも読み込むことも可能である。

さらにこの寺社参詣にともなう饞別としてお寺様（臨濟宗瑞龍寺）からも饞別を頂戴し、さらに留守見舞もいただいている。また、留守見舞の品々としては赤飯・饅頭・饅頭粉、花餅、西瓜、豆腐をもらっていたことがわかり、当時の付き合いによる贈答儀礼の関係の在り方まで示唆してくれる。ただし、こ

の在り方が当時の一般的なものであったわけではなく、前掲したように七代当主かつ地域でも幼少の頃から人間的に一目置かれていた逸話が語られていることから⁸⁾、それが当然のごとく50日近くも家を留守にすることが可能であったこと、付加して中馬の継送りを11ヵ村に依頼するなど、暉兒の英四郎への期待をこめた旅であったことは疑いない。ましてやそれだけの経済的基盤がなければできない長期の参詣旅行であったのである。

④の「おかげ参り他施し金控」は奥三河における近世後期（文政13年か）のお蔭参りの諸相を知る貴重な史料であろう。お蔭参りとは江戸時代にみられた伊勢神宮への民衆の大量群参である。慶安3年（1650）・宝永3年（1706）・享保3年（1718）・享保8年（1723）明和8年（1771）・文政13年（1830）と6回にわたって、おおよそ60年ほどの周期で起こっている。お蔭参りの特徴的現象は、神宮の大塚が降下したことによる奇譚や噂などが契機に起こり、60年に一度よい年が訪れるという期待も人々にあって、群参を引き起こしたといわれている。また、お蔭参りには沿道の住民からの施しが行なわれるのが通例であった。また、お蔭参りがはじまると、これに便乗してとくに若者たちによる抜け参りが頻繁にみられたことから、お蔭参りと混同されがちである。

19世紀初頭の文政年間のお蔭参りには、人々が手に柄杓をもって集団参拝する光景が多く見られた。また近世後期のお蔭参りの集団参拝の状況を芸能化した「お蔭踊り」が関西を中心に発生し、幕末の「ええじゃないか」の騒動に拍車をかけたともいわれている。豊田市黒田に残っている記録が、お蔭参りとその在り方にどのように関わったかは判然としないが、少なくとも奥三河の近世後期の「お蔭参り」に伴うある程度の実態は知ることができるであろう。

さらに、伊勢信仰との直接の関係は見出せないが、幕末の稲の品種のなかに「世直し」とよばれるものが古橋家で確認される。これも拡大解釈をすれば、伊勢信仰と世直し運動、いふなればお蔭参りとの関係も見出すことが可能であろう。

8) 國府種徳（1912）『古橋源六郎翁』愛知縣北設楽郡農會

三 大峯講・金毘羅講などに見る参詣習俗

大峯講(行者講・山上講)とは、比叡山の千日回峰行者に代表されるように、宗教的な特別な修行をした者によって、その行者を慕いつつ宗教実践に励む集団をいう。とくに全国各地の山岳霊場で厳しい修行を積んだ修験者集団を総称することが多く、東北地方の出羽三山(羽黒山・湯殿山・月山)、なかでも湯殿山行者、木曾御嶽の行者、畿内を中心とする熊野行者、大峯行者などに連なるものが多い。ただし、これらのいわば中心的な修験者集団による行者講だけでなく、とくに近世以降顕著となった修験者の村方に定着する(里修験)過程で、名も知れぬ行者に連なる行者講も多く族生している⁹⁾。

また、山岳行者たちの多くは、修験道の始祖とされる役小角(えんのおづぬ・奥三河ではほとんど行者さんと称している)が近世中期に「神変大菩薩」として神格化すると、より役小角に関わる行者講が各地に誕生した。なかでも同時期に一般民衆に接して、シャーマン的な神がかりをする行者が出現する。その代表格が木曾御嶽山(3067メートル)に関わる御嶽行者であり、とくに木曾・尾張・三河方面を中心に活躍した覚明行者、江戸および中山道周辺を活動の基盤にした普寛行者によって族生した行者講が、今日でも精力的な活動を展開している。このほかにも日蓮宗の行者が七面山(1982メートル・山梨県)や中山法華経寺(千葉県市川市)で厳しい修行を積んだのを契機として行者講(題目講)が結成されさまざまな民間信仰に関わりをもっている。

稲武町内で確認される行者講に関連した石造物は16基あるが、なかでも小田木・黒田・富永・野入の国道153号周辺に祀られているものが多い。

以下、行者様(行者さん)をめぐる石造物の年代別造立数と、各大字ごとの造立数を確認しておこう。

表1 稲武町内に見られる行者供養塔一覧

年代		造立数
宝暦10年～明和6年	1760-69	1
明和7年～安永8年	1770-79	1
安永9年～寛政元年	1780-89	2
寛政2年～寛政11年	1790-99	1
文政3年～文政12年	1820-29	1
万延元年～明治2年	1860-69	1
年代不明		9
合計		16

大字名	造立数
稲橋	1
中当	0
夏焼	1
野入	2
大野瀬	2
押山	2
武節町	1
桑原	1
御所貝津	1
川手	2
黒田	1
小田木	1
富永	1
合計	16

ちなみに最古のものは明和4年(1767)で、最新のもの明治元年(1868)である。

さて、稲武地域に祀られている行者様を紹介してみよう。ただし、行者様と統一した呼称で紹介していくが、各地区では大峯の行者さんとか神変さん、山上様などとよんでいるところもある。

黒田では石彫りの行者様が祀られているが、この行者様は黒田集落全体で祀っているのではなく、個人の家何代か前の人が大峯の信仰を守っていたときのもので、現在(平成4年時点)は小瀬垣千三氏宅地内にある。取り立てて祭礼は行っていないが、何か特別の物を作ったときにはお供えとして上げているという。

9) 拙著(2007)『近世の遊行聖と木食観正』吉川弘文館、拙稿(2015)「旅する花太夫—奥三河花祭の文化交流から」『地方史研究』第65巻第4号、拙稿(2016)「廻国行者から木食行者」『地方史研究』第66巻第5号

小田木（高田木）の行者様は破損状況が大であるが、村人によれば、おそらく明治初年に頭の部分だけが飛ばされたのであろうという。そのお姿があまりにも気の毒なので祀るようになったとも言われている。

現在ではこれといった行事は開催されていないが、高田木組のなかで気持ちのある人が花や供物を上げるなどしている。

小田木（小田木西）には行者岩というものがある。連谷川に面していて、村人が次のような伝承をもっている。いつのころか定かではないが、岩の下で諸国行脚の修験者が修行をしていたという。その後、大峯山から行者がよばれてこの岩を祀りはじめたとのことである。

小田木西組の行者様は小田木・御所貝津・連谷の三地区の合同で祀られていたが、現在では、小田木西組のみで祀り、それも「お龍様」の祭りごとと一緒に祀っている。ちなみに祭礼日は7月16日になっている。この行者様は天明2年（1782）の造立で、稲武周辺でも最古の部類にはいる。銘文に、

天明二壬寅年四月八日

此字組講連中百三十五人

講頭

小田木村 後藤伊右衛門

御所貝津村 今泉新四郎

連谷村 安藤定右衛門

とある。

3村によるものとはいえ、江戸中期それも「天明の飢饉」直近の天明2年（1782）当時135人もの人々が行者講に参画していたとは驚きである。ちなみに小田木には大峯講に関わる版木（年代不明）があり、当時の大峯講がかなり村落内部に浸透していたことがわかる。

富永の行者様は、それだけで信仰されているのではなく、文殊菩薩と共同で祀られている。毎年7月18日を祭礼として、戸数は八戸と小さいが、村中あげての祭りとして盛大に行っている。祭礼当日にはお神酒の振舞や投げ餅なども行われている。この

行者様が文殊菩薩と一緒に祀られていることから、村外からも学問の神様、子供の神様として親しまれ、子供連れの参詣者もあるという。ちなみに文殊菩薩は、文政5年（1822）8月の造立である。さらにこの文殊様と行者様の背景には富永においては駒山（小馬寺）と江戸時代の文化・文政期に江戸時代最大の「生き仏」として江戸市中はもとより、東国で活躍された徳本上人（富永集落には徳本上人に関連する「六字名号塔」が造立されている）との繋がりも確認されるが村人の伝承は確認されない¹⁰⁾。

夏焼の行者様は稲武町内でも一番立派で、青木河の大きな岩の下に祀られている。村ではかつて御嶽講の人たちが中心になってこの行者様を祀っていたが、昭和10年代の後半から行われなくなっている。しかし、この像は典型的な役行者像であり、本来は大峯講に関わる者によって祀られていたと思われる。御嶽講によるお祭りがなくなってからは、山の神講のときに一緒にお祭りする。野入の行者様も夏焼の役行者を祀ったものであり、かつては修験者がきて、九字を切って祀り、餅などの接待もあったという。

ここで、稲武周辺の行者様の信仰対象になっている役行者（役小角）について少し紹介しておこう。役小角とは古代の葛城山にいた呪術師である。一般的には役行者として知られている。実在者としての小角は、葛城山を拠点とする祈禱者であった。その呪術能力はことのほかすぐれ、律令体制の伸展に不安を覚えはじめた人々には、絶大な人気を博したという。衆望を妬んで誹謗される一面もあったが、その後も彼の卓越した能力は人々の崇敬の対象であり続けた。仏教界においても古密教の呪法を会得した優婆塞であるといわれるようになった。この役小角のイメージと修験者のイメージとが時代の流れとともに重複され、さらに地方における修験道場の展開の中で役小角とのつながりを強調されることが多くなり、やがて江戸時代の寛政年間に至ると、彼は「神変大菩薩」として信仰の対象となった。こうして稲武周辺にも数か所確認されるように、役小角像が

10) 拙著（2008）『念仏行者と地域社会—民衆のなかの徳本上人—』大河書房、拙著（2016）『奥三河のまつりごと—修験・木食・神楽・念仏そして花祭へ—』古橋懐古館

村々に造立されていったのである。

彼の像は斧を持つ前鬼, 水瓶を持つ後鬼を従え, 右手には錫杖, 左手に経巻を持って座るものが多い。ちなみ稲武周辺では前鬼・後鬼を従えた像は確認されていない。

行者講に関連した史料としては天保7年(1836)「大峯登山御酒迎覚」と万延2年(1861)「行者講勤次第」の二点を古橋家の記録に見ることができる。

「	天保七年	
大峯登山御酒迎覚		
	申四月十五日」	
一 赤飯貳重	村	平左衛門殿
一 小豆小貳重	村	乙八殿
一 同大貳重	御所貝津村	治兵江殿
一 そば粉	夏焼	伊左衛門殿
一 うどん壺重	村	丑太郎殿
一 小豆飯貳重	村	幸兵江殿
一 同 貳重		勘助殿
一 同		常平殿
一 同	夏ヤケ	治郎兵江殿
一 同		嘉忠殿
		由太郎
		長左衛門
		弥右衛門
		作右衛門
		秀助
		惣四郎
		菊松
一 酒壺樽		吉右衛門
		兵左衛門
		弥平
		伊兵衛
一 赤飯貳重	武節	文五郎様
一 同	野入	弥右衛門様
一 同	野入	猪兵衛様
一 椎茸	野入	善兵衛様
練羊かん壺		泉屋
粟食壺重		
一 御酒壺樽	野入	順助様
一 百文	野入	多吉

印有貳貫八百文		
印無 三百文		
一 百文		町 坂本殿
一 貳百文		町 仁兵衛様
一 百文		桑原 林蔵
一 百文		中当 弁助様
一 同		村 善蔵様
一 同		村 松太郎様
一 同		村 利吉様
一 五人札		村 平左衛門様
一 百文		村 茂十様
一 百文		村 熊蔵様
一 同		村 仙弥様
一 志ん竹少		村 徳蔵様
一 百文		村 菊右衛門様
一 五拾銅		夏ヤケ 助治様
一 貳拾疋		々 猪右衛門様
一 拾疋		々 丈吉
一 拾疋		家内ものへ召仕 清七
一 金一封		代五十文 三治郎
一 羽織ひも		代六十文 兼二
一 御守袋		代六匁九ト とら二
一 腰ひも		勝二
一 きせる		代三匁五ト五厘 伊助
		角二
		才二
		清吉
一 かんざし		代貳匁七トツヅ くら
		はる
		御酒迎
		当村ト
一 拾疋		弥五郎
		弥平
		金蔵
		種吉
		増蔵
		元右衛門
		孫右衛門
		吉蔵
一 貳拾四銅		嘉七様

一	拾疋		乙八殿	一	百文	大のせ	新助
一	拾疋	中当	清兵衛殿	一	上 御札		栄蔵
一	拾疋	々	源吉様	一	中 同 しずのり	大ので	常五郎
一	拾疋	々	新吉様	一	上同	川手	又右衛門
一	同	々	久作様	一	上同		床六
一	同	々	兼吉様	一	中同		庄右衛門
一	同	々	常平様	一	中同		小六
一	同	大野瀬	栄蔵様	一	中同	おし山	與右衛門
一	同	黒田	前吉様	一	上同		吉右衛門
一	同	下中	伝蔵様	一	中同		弥助
一	弍拾疋	根羽	伝治様	一	外あぶら一代百文		
一	拾疋	桑原	忠助様	一	上の中	御札	六良右衛門
一	同		喜兵衛様	一	外 揚板はし 二十五ぜん		
一	拾弍銅	村	与四郎様	一	上ノ御札	川手	吉左衛門
一	百文	下中当	平治郎様	一	中五分 あぶら一	御所	半七
一	三拾弍銅	村	清右衛門	一	中分	御所	治左衛門
一	拾疋	夏ヤケ	治右衛門様	一	御札	黒田	唯四郎
一	同		弥八様	一	外あぶら 一代百文		
一	弍拾疋	桑原	銀之助様	一	一代		
一	三拾弍文	下中当	栄蔵様	一	御札		光三郎
一	同	夏ヤケ	孫八様	一			幸七
一	青銅拾疋	武節	孫兵衛様				宗右衛門
一	御酒壺樽	武節	周蔵様	一	御札		伊右衛門
一	拾疋	野入	兼治様	一	御札		新右衛門
一	御酒壺樽	野入	伊左衛門様	一	御札 あぶら代百文		藤蔵
一	弍百文	野入	由蔵様	一	御札		元吉
一	百文	野入	弥五郎様	一	御札 手拭		新助
一	百文	野入	善助様	一	御札		利右衛門
一	百文	野入	彦太郎様				多平
一	百文	野入	弥右衛門様				弥吉
一	百文		源吉				伊兵衛
一	百文		新吉				吉左衛門
一	百文		彦兵衛	一	上 御札		三省
一	百文		仙弥	一	中 御札		弁助
一	百文		十左衛門		はし二せん		
一	百文		善助	一	々		茂十
一	百文		熊蔵	一	々		与吉
一	百文		菊右衛門	一	々		歌吉
一	百文		兼吉	一	々		彦十
一	百文		新吉	一	々		茂吉
一	百文		五郎右衛門	一	々		祐二郎

一 々		利吉
一 々		才二郎
一 々		清吉
きせる代三厘五分		
一 々		今治
きせる代同断		
一 々		周助
きせる代同断		
一 中 御札		
はし 二七ん		
一 々		半右衛門
一 々		喜兵衛
一 々		柳助
一 々		周蔵
一 々		嘉七
一 々		利七
一 々		孫兵衛
外二あぶら一代百文		
一 上 御札	御所貝津	春城
外まわり 一代百文		
丹羽書一枚		
一 上 銅		治兵衛
小せん代百文		
一 上		佐四郎
同廻り代		
一 貝のし		
一 中		
同廻り代		斧吉
貝のし		
一 中		周兵衛
同廻り代		
貝のし		
一 中札		忠七
外中油		
(一部略)		

によっても信仰内容の違い、とくに村を超越して地域が拡大している講員の講集団（大峯講）と比較的に村内で講の構成員が完結する場合には明らかにこの史料にも散見するように参詣習俗にともなう在地講の展開が異なっていたことを見出すことができるであろう。史料によれば、修験道の霊山であり十数年前には世界文化遺産にも登録され、日本の修験道かつ行者にとっての聖地でもある大峯山（奈良県）登山に対する留守見舞や餞別の記載内容から、登山者の付き合い関係が稲橋村より隣村の夏焼村、野入村に集中していたことが具体的に記されている。さらに酒迎えとなっているが、帰村した祝いの状況、餞別をいただいた人々への土産も詳細に記してあり、お札はもちろん付き合いの関係によって煙管・手拭・酒・簪・腰紐・羽織紐・衿・貝のし・ゆべし・びんせん・はし・伊勢のり・楊枝・箸箱・青のり・風呂敷などがあげられている。いずれも腐らずかさ張らない小物を中心に行っていることがよくわかる。それにしても餞別をみると優に200人を超えるものであり、大峯登山により交遊関係の広がったことが確認される。また酒迎えの料理についても赤飯・蕎麦・饅頭・饅頭粉・小豆飯・羊羹・あめの魚・山芋・茶飯・草餅などが記されており、当時の酒迎えという儀礼食にどのようなものが利用されていたかわかる。さらに今回は紹介することができなかったが「酒迎え」に使用した熱燗道具などが古橋懐古館に展示されており機会があれば後日紹介したいと考えている。

本稿は平成27年度交通史学会秋季大会、平成27年9月19日豊田市稲武交流館で行った公開講演「伊勢信仰と街道—古橋家文書からみる」をまとめたものである。

これによると、前掲した伊勢講・金毘羅講と大峯講の性格が留守見舞、坂迎にかぎっても明らかに同じ信仰集団であっても性格の異なるものであったことが明らかとなる。一般に講集団の研究は民俗学の櫻井徳太郎のアプローチによれば同一村内の講集団